

2024年6月9日 説教「千人隊長の驚き」

使徒の働き 22章 22～30節

ユダヤ人の前で、パウロはダマスコ途上でキリストと出会ったこと、エルサレムに戻った後に、アナニヤからも示唆されていましたが、異邦人伝道への召しをいただいたことを証したのです。



1. 騒ぎ出すユダヤ人たちと千人隊長の対応 (22～24節)

①ユダヤ人達の反応 (22)「人々は、彼の話ここま聞いていたが、このとき声を張り上げて、『こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない。』と言った。」

ヘブル語で話し出した時は静まって聞いていたユダヤ人でしたが、「異邦人」という言葉を聞くや、一気に反応しました。声を張り上げて、「こんな男は彼を地上から除いてしまえ、生かしておくべきではない」と激しく罵ったでした。

②わめき立て (23)「そして、人々がわめき立て、着物を放り投げ、ちりを空中にまき散らすので、」

そして、人々はわめき立てました。また、「着物を放りなげ、ちりを空中にまき散らしました。」それは彼らのパウロに対する、憎しみと怒りの表現であり、むしろ石などでなかったのは幸いなことでした。

③パウロは兵営の中に (24)「千人隊長はパウロを兵営の中に引き入れるように命じ、人々がなぜこのようにパウロに向かって叫ぶのかを知ろうとして、彼をむち打って取り調べるようにと言った。」

ヘブル語のわからない千人隊長は、なぜ騒がしくなっているのか、把握できませんでした。そこで、パウロを兵営の中に入れ、人々の叫んでいる原因を探るべく、パウロを取り調べようしました。それもむちを打ってから調べるというのです。このむちは皮で作られていますが、先のとがった骨や鉛がはめ込まれていて、時には死を招くようなものでした。

2. むち打ちをすべきか否か (25～27節)

①市民である者を(25)「彼らがむちをあてるためにパウロを縛ったとき、パウロはそばに立っている百人隊長に言った。『ローマ市民である者を、裁判にもかけず、むち打ってよいのですか。』」

命令に従ってローマ兵たちが、むちをあてるためにパウロを縛りました。パウロはこれまでも数々のむち打ちを受けてきました(Ⅱコリント 11:24, 25)。しかし、目の前にあるむちは危険であることがよくわかりました。そこで、監視していた百人隊長に、「ローマ市民である者を、裁判もかけずにむち打ちをしてよいのですか」と尋ねます。

②百人隊長の報告 (26)「これを聞いた百人隊長は、千人隊長のところに行って報告し、『どうなさいますか。あの人はローマ人です』と言った。」

アこれを聞いた百人隊長は、自分だけでは判断できないことであると

思い、千人隊長のところに報告したのです。「あの人はローマ人と言っていますが、どうしましょうか」。ローマ人にはこの刑は免除されていましたので、処し方を尋ねたのです。

③千人隊長の質問 (27)「千人隊長はパウロのところに来て、『あなたはローマ市民なのか、私に言ってくれ』と言った。パウロは『そうです』と言った。」

後これを聞いた千人隊長は自ら出向いて、パウロにたずねました。「あなたはローマ市民なのか。私に言いなさい」。すると、パウロは躊躇なく、「そうです」と答え得ました。

3. パウロの処遇をめぐって (28～30 節)

①生まれながらの市民 (28)「すると、千人隊長は、『私はたくさんの金を出して、この市民権を買ったのだ。』と言った。そこで、パウロは、『私は生まれながらの市民です。』と言った。」

千人隊長は驚きます。なにしろ、自らは多額のお金で、ローマの市民権を買ったのです。ところが目の前の男は、それを生まれながらにして持っているというのです。かつてはともかく、今やパウロの外見は貧相と言っても良いような状態です。そんな男がローマ市民であると言われてもにわかには信じがたいところです。

②千人隊長の恐れ (29)「このため、パウロを取り調べようとしていた者たちはすぐにパウロから身を引いた。また千人隊長も、パウロがローマ市民だとわかると、彼を鎖につないでいたので恐れた。」

パウロがローマ市民であるらしいということが、取り調べをしようとしていた者たちに伝わると、彼らはパウロに手を出すことをやめました。千人隊長もパウロの証言となんらかの証拠により、パウロがローマ市民であることを確認すると、いささか慌てましたし、恐れもしました。なぜなローマ市民にはしてはならない鎖につないでいたからです。

③パウロの鎖を解き (30)「その翌日、千人隊長は、パウロがなぜユダヤ人に告訴されたのかを確かめたいと思って、パウロの鎖を解いてやり、祭司長たちと全議会の召集を命じ、パウロを連れて行って、彼らの前に立たせた。」

千人隊長には、ユダヤ人同士の問題がどうにも理解できませんでした。どうして、パウロが訴えられ、彼らに拘束されかけていたのか。こうしたことを、確かめるために、まずはパウロの鎖を解きました。その上で、相手方である祭司長たちとユダヤ人議会の召集を命じました。そして、パウロを彼らの前に立たせたのです。

《結論》

千人隊長というのは文字通り、千人の兵のトップです。千人隊長は一兵卒から見れば、雲の上の存在に思えたことでしょう。ローマ帝国からも信頼を受けて、この責任を与えられたはずです。ところが、ここに出てくる千人隊長

も、以前はローマ市民権を持っていなかったのです。その立場や、威厳をつける意味でも、どうしても市民権が欲しかったでしょう。この千人隊長はそのため、多額のお金で市民権を手に入れたのです。

一方のパウロは世の中の地位を持つ人ではありませんでした。確かに、彼の働きを通して多くの人々が救われて、キリストの前に出たことは確かです。しかし、それは千人隊長の力からすれば、何の力も持たない存在だと思われたことでしょう。ところが、そのパウロは生まれながらにローマの市民権を持っているというのです。これについては、パウロの父か祖父が市民権を買ったのではという学者がいますし、ブルースという学者はパウロの父がローマ帝国のため、何らかの貴重な貢献をしてこれを手に入れたのではと類推しています。

パウロはこれまで、この特権を頻繁に利用してきたわけではありません。ピリピの獄中にあるなか、地震が起きた時、パウロが伝道した人々は誰一人逃げ出しませんでした。自害しそうな看守と家族も救われました。この出来事の後、長官から釈放命令が出ましたが、パウロはむち打たれ、取り調べなく獄にいた責任を追及した時に、自らがローマ市民であることを伝えていきます(16:37)。長官は驚いて、直接やってきて、詫びたということがありました。市民権はそれほど重視されていたのです。

こんなことから千人隊長は、パウロがローマの市民権を持っていることに驚きました。21:39でもそれをにおわせていました。しかし、千人隊長はタルソ市民であるとしても、ローマ市民権だとは想像もしなかったようです。ですから心底驚いたのです。天幕作りをしながら、伝道をしてきたパウロは、様々な苦難(Ⅱコリント11:24～27)も重なって、風采が上がりかかったかもしれません。そんなパウロが自らと同等の市民権を持っているということに驚き、パウロの背後にある大きな不思議な存在を感じ、驚いていたと思われます。

かつて、預言者サムエルはサウル後の王の選びのために、エッセイの家にまで導かれました。最初に会ったエリアブは立派で、まさにその人だと思ったのです。ところが、主はサムエルに「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る」(Ⅰサムエル16:6)と言われ、結局選ばれたのは、そこにはいなかった末の子で羊飼いのダビデでした。

パウロが用いられたのは、彼が優れた律法学者であり、ギリシャ語に通じ、ローマの市民権を持つといった、この世の力があつたからだという点に目が行きがちです。しかし、その背後の主がそれらを用いられたからです。大竹海二先生は小さい頃に小児マヒになりました。苦勞して東京芸大作曲家を卒業。しかし、献身して牧師の道に進まれました。主は、その弱さや能力を用いられ、数教会を経て、今でも鈴鹿で牧会をされています。私達の信仰生活、教会生活、宣教も外側の力に目が行きがちですが、聖霊の主が働かれると、私達の外側も用いられるのだと覚えましょう。この世の弱さも主は用いられます。何かがあるからではなく、それを用いられる主がおられるからです。私達も教会も主なる神から器として用いられるよう祈っていきましょう。